The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本ユニセフ協会による東日本大震災支援活動に携わって
Author(s)	西原, 三佳
Citation	目で見るWHO. 2011, 46, p. 21-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86781
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本ユニセフ協会による東日本大震災支援活動に携わって

HANDS　西　原　三　佳

HANDS（特定非営利活動法人Health and Development Service）は、2000年1月に立ち上げた、国際保健医療協力を行うNPO。保健医療の仕組みづくりと人づくりを通じて、世界の人々が自らの健康を守ることができる社会を実現したいと考え世界各地で活動しています。
http://www.hands.or.jp/

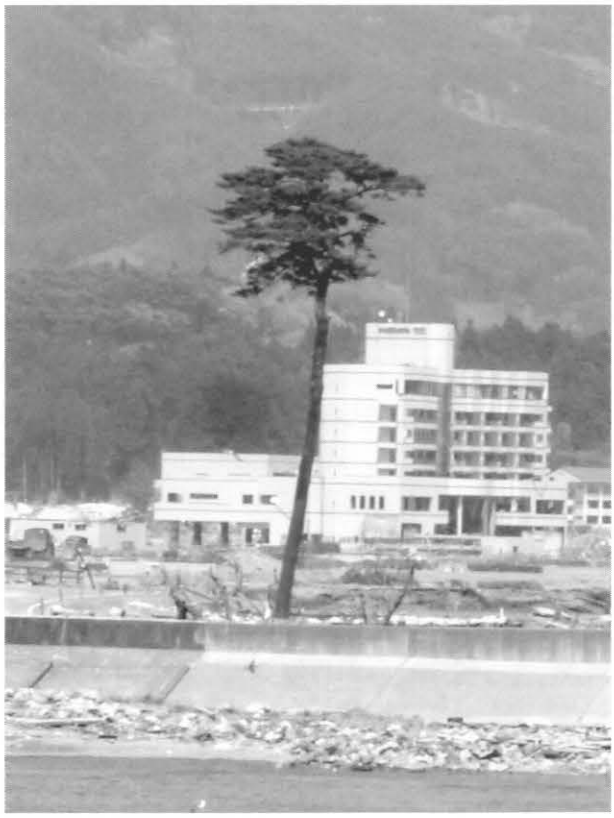
Mika NISHIHARA
1970年10月生
2008年　タイ国立マヒドン大学公衆衛生学修士
国内病院勤務後、青年海外協力隊に看護師として参加
2008年6月よりプログラムオフィサーとしてHANDS勤務　ホンジュラスなどで活動
看護師、保健師

「どうか未来ある子どもたちを守ってください！お願いします！」私の心に強く響いた陸前高田市健康推進課長の言葉です。

私は、日本ユニセフ協会による東日本大震災支援活動に、2011年4月上旬からボランティアとして携わっています。私の所属先は、国際保健医療協力を行うNPO『HANDS』で、今回のボランテイア活動も、HANDSによる東日本大震災支援活動の一環として行っています。活動の中心地は岩手県で、特に津波の被害が大きかった県内6市へ支援をしています。その中でも、これからご紹介する陸前高田市は特に被害が大きかったところです。本稿では、私の目から見た陸前高田市の被災状況や、保健医療サービスの現状、そして、困難から立ち上がるために不眠不休で頑張っておられる陸前高田市の健康推進課の皆さんや、保健師・看護師の皆さんの様子などをお伝えしたいと思います。

岩手県陸前高田市は、三陸海岸南寄りに位置する人口約2万4千人の市で、日本百選にも数えられる白砂青松の浜、高田松原が有名です。

特に砂浜沿いに植えられた7万本もの松と白浜が美しく、岩手県を代表する景勝地として、毎年の観光客は40万人にも上るそうです。



津波に耐え一本だけ残った高田松原の松。
奇跡の一本松として復興のシンボルとなっている。

しかし、その美しい景色を有する陸前高田市は、3月11日の大津波により市街地の86%にあたる約2.5㎢が津波に襲われ、9㎢が浸水しました。津波直後の報道では「市は壊滅状態」と報じられ、

7万本もの松原も、多くの人々が生活をしていた町も、津波により無残に破壊されてしまいました。5月10日の発表によると、同市の死者は1,466名、行方不明者729名、被災世帯は3,845世帯、避難者数は14,550名となっています。

私が陸前高田市を初めて訪問したのは、震災から1ヶ月近く経とうとしていた4月7日、東北の厳しい寒さが未だ残る時期でした。陸前高田市へ向かう車中、市街地まであと6㎞ほどというところで、山間部を流れている気仙川にふと目をやると、川沿いのあちこちに瓦礫が散乱しているのが見えました。海からはるか遠く離れた山間部のこんなところにまで津波が押し寄せてきた事実に、大きなショックを受けました。

川沿いに散乱する瓦礫に目を奪われていると、道一本隔てたに目の前に、信じられない光景が一気に広がりました。陸橋の線路は分断されて糸のように垂れ下がり、家を支えてきたはずの木材がバラバラと散乱し、木々の枝々には洋服や布団が引っかかり、畑には船が転がり、まるでプレスされたかのように原形をとどめていない数々の車と、仰向けになって転がっている重機や家々…。そこにどんな街や建物が存在していたのか全く想像できない程、それは凄惨な光景でした。マスコミ報道からだけでは分からない、私の想像をはるかに超える被害の甚大さと津波の傷跡に言葉を失いました。まだ海水が残り磯の匂いが漂っている、まるで時間が止まってしまったかのような悲惨な光景に、静かに涙が溢れました。

少し小高い山の方へ進んでいくと、災害対策本部横の空き地に設置された、プレハブの市役所仮庁舎が目に入ってきました。ここに、市の健康推進課も設置され、保健行政サービスを担う保健師さんたちが活躍されていました。

市街地の海岸近くに位置していた陸前高田市役所は、津波によって市職員の約4分の1が死亡または行方不明となり、健康推進課でも保健師・看護師9名のうち6名が犠牲となったそうです。

「どんどん入ってくる支援に対応するので精一杯だった」。そう語るのは陸前高田市勤務30年以上の大ベテラン看護師さん。津波に襲われた3月11日、彼女は必死に市役所の屋上に駆け上がり、寒空の中、他の職員と共に不安な一夜を過ごしたそうです。翌12日の朝、なんとか通れる道を探し、順番に高台の現災害対策本部である給食センターや、避難所となっている中学校へ移動。到着した自衛隊や警察と共に避難所を歩いて回り、住民の状況把握に走り回る日々が始まりました。入浴もできず、家に帰る事も出来ず、全国の市町村から次々と入ってくる支援への対応を同僚と手分けして行い、不眠不休の生活がしばらく続いたとのことでした。県内近隣市町村からの行政支援チームによって、支援団体の調整と保健支援チームの拠点作りが行われ始めたのは、震災後10日ほど経ってからでした。その頃になってやっと、本来業務である保健行政サービスの準備に入ることができるようになったそうです。

3階まで被災した陸前高田市役所

プレハブの仮庁舎で使用している机やいすは、震災後に探してなんとか見つけてきたもので、当然ながら住民に関する今までの記録やデータはほぼ全て消失しています。保健行政サービスを再開したくとも、記録も無い、物品も無い、人もいない・・・という困難な状況のなか、健康推進課では「母子保健を最優先に」という目標を掲げて業務を再開しました。

「将来ある子どもたちを救いたい、守りたい、そして陸前高田の将来を子どもたちに託したい」。それは文頭の課長の言葉のとおり、健康推進課全体の願いでした。そして再開された母子保健サービス。私が仮市庁舎を訪れた4月初旬には、母子健康手帳再発行や乳幼児健診および予防接種実施準備が行われていました。

その後、仮診療所で診療を続けている県立病院

との連携や、医師会との連携、さらに支援団体との連携などが行われ、４月下旬には被災後初めての乳児健診が、県立病院仮診療所にて実施されました。20 名の赤ちゃんが健診を受けることができ、何よりも健診に来られたお母さんたちの安心した様子が印象的でした。

また健康推進課では、母子保健サービス再開のみならず、保健行政全体についても「今まで経験した事のない事が起きているからこそ、今までとは違う視点が必要になる」という認識のもと、様々な外部支援団体に対してサポートの必要性を訴え、積極的にアドバイスを受け入れて、実行に移しておられます。その熱意と積極的な姿勢には、日々、本当に頭が下がる思いです。「住民のために、地域の健康を守るために」という思いを大切に、積極的かつ柔軟に対応していく事がとても重要なのだということを、陸前高田市の職員の皆さんに教えていただきました。

市職員の方々の熱意と努力の結果で、６月には全ての予防接種と乳幼児健診が再開される予定です。そして、その他の保健行政サービスも順次再開されていく計画です。

「何もしてないけど、皆さんの支援のおかげでここまで来られました」と陸前高田市職員の方々は口をそろえておっしゃいます。あの３月１１日の大津波から無我夢中で走ってこられたからこそのお気持ちなのだと思いますが、自らも被災者である職員の方々のご尽力には、本当に敬服します。

避難所近くから望む陸前高田の市街地

そんな職員の方々からメッセージをいただきましたので、以下ご紹介します。

「陸前高田市の市民全員が被災者です。家が残っていようがいまいが、誰に聞いても家族や親戚など、大切な人たちを失っています。皆さんのおかげでここまで来たけれど、もう少し、もう少し長く支援をしてほしい。まだ生活自体も元の状態に戻っていないのです」。

震災後２ヶ月が経過しました。しかし、陸前高田市では「つい数日前にやっと一部の地域で水道水が使えるようになった」というのが現状です。下水に至っては、全く復旧できていません。津波被害がもたらしたものは、それだけ甚大だったのです。

「あれから、もう２ヶ月経った」と、震災をすでに遠い過去の出来事のように感じておられる方もいらっしゃるかもしれません。しかし、被災地では「まだ２ヶ月しかたっていない」というのが現状です。陸前高田のみならず、被災地の多くでは、まだまだ支援を必要としています。日本人の誰も経験した事のない大震災からの復興にあたり、被災地の外に住んでいる我々にできる事、そしてやるべき事は、「震災を過去の事にせず、年単位での長期的で継続した支援を行っていく事」だと思います。この場をお借りして、被災地の現状に対するご理解と継続的なご支援を、心からお願い申し上げる次第です。